
スモーキークオーツ

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマートキークオーツ

【NZコード】

N0130X

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

新宿の雑居ビルが立ち並ぶなか、佐木田英輔のスリーエス事務所がある。今日の依頼主は矢野久美だった。

「鉄骨の回廊」「雨にぬれた綿毛」の佐木田英輔シリーズ第二弾です。

登場人物の紹介

佐木田英輔

何でも引き受ける便利屋をスリー・エス事務所を開いている。
自身で女好きの四〇代後半。喫茶店梓には毎日通う。

久ちゃん

佐木田の一番のお得意客。気のいい四〇が目前のホステス。
クリーニングの引き取りや寂しい時の相手など、何でも佐木田に
電話する。

梓ママ

喫茶店梓のママ。

気立てがよくこの物語に出てくるみんなの胃袋を支えている。
佐木田に好意があるよつはないような。

石上刑事

一人娘がいる愛妻家。梓の常連客。

テレビのタレントに似ていることから梓ママからは石ちゃんと呼
ばれている。

藤原組長

大学出のインテリやぐぞ。だが、義理人情は厚く佐木田の話相手。
梓の常連客。

プロローグ

新宿は夜になれば華やかな街に変わる。

さきたえいすけ

そんな歓楽街の少し奥まったところに佐木田英輔のスリーエス事務所がある。便利屋なのだが、黒い裏稼業にも精通しているから、いろいろなところから依頼は来る。一番の依頼主は久ちゃん。

今日も佐木田は暇で朝からぼーっと過^くしていると久ちゃんから電話が入った。

「ねえ、英ちゃん、ちょっと来て」

「おー、いいとも」

喜んで出かける。

出かける前には栄養ドリンクを一本。

「うまい！」

久ちゃんは四〇が田の前。それでも、氣立てのいいホステスだ。最近は少しふっくらしてきて本人はダイエットをするというばつかりで、一つも長続きしない。だが瘦せたホステスなんて面白くない。佐木田はトントンと足取りも軽く上がっていくと、久ちゃんが立つていた。

「おやおやお出迎えですか。さあさあ、部屋へ入りましょ。ビールのマッサージしようかなあ」

「英ちゃんたら違うわよ」

「何を照れてるんだよ。ドリンクも飲んできたんだから」

佐木田は背中を押して部屋へ入る。

久ちゃんの丸い乳房にワンピースの開いた胸元から手を入れる。

「違うんだつたら」

「何だよ、今日はいいんだる。それともアンネの日記か」

「もう、そんなふざけた話じゃないの」

嫌がるそぶりを見せながらも、体を触ることは許してくれる久ちゃん。

佐木田が久ちゃんを後ろから抱きながら尋ねてみる。

「ホントに仕事の話か」

「うん。うちのすみれちゃんから頼まれたの」

「ふーん」

そう言いながらも後ろから乳房を触る左手を休めない。右手はさらにショーツへと伸びていく。

「ちょっと、触られたら落ち着いて話ができないじゃない」

「ふんふん、そなんだねえ、久ちゃんここは？」

「嫌だつたらあ、英ちゃんたら」

そう言いながら振り向き、唇を塞ぐ。

ピンポーン。

「何だよ」

「忘れてた、すみれちゃんよ」

「後にしてもらおうよ。ホラ、俺だつてこんなに」

「ダメ」

久ちゃんは立ちあがつてドアへ向かつ。

佐木田は思い切りテンションが下がつて不機嫌そうに寝転がる。入つて来たのは、三〇くらいだろうか、瘦せたホステスだった。佐木田の好みではないが、顔立ちは整つており細面にショートの髪が余計に小顔に見せた。目は切れ長で日本の美人だ。和服でも似合いそうだ。

「こんにちは」

「あ、どうも。佐木田です」

「私、矢野花絵です。店ではすみれって名前ですけど」

久ちゃんはキツチンに立ちヒーヒーを入れている。

「私に何か用があるとか」

「ええ、佐木田さんのお力を借りしたいんです。弟を見つけてください」

「捜索願は警察の方が早いかもしませんよ」

「ええ、でも弟は死んだことになつてゐんです」

「は？」

矢野花絵には三歳下の弟正勝まさかつがいた。弟は高校卒業すると、姉のいる東京に来て働きだした。初めは焼肉店の厨房に見習いとして入ったが、いつの間にか仕事が辛いとか言って、パチンコ店、スナックというように落ち着かなかつた。だんだんと姉にも借金するようになり、四ヶ月前から行方も分からなくなつた。

最後に会つた時、真剣な表情でさらに一百万の借金を申し込んだ。今までで百四十五万貸していた。花絵にしてもそんなに金があるわけではなく、無理だと突っぱねると泣いてこう言つたという。

「姉さん、この金がないと俺は殺されるかもしれない」

「一体何をしたの。誰に払う金なの」

「人を撥ねたんだ。それが社長の息子だった。でも、どう見てもあつちが飛び込んできただ」

「交通事故なの？ その人は無事なの？」

「ああ、無事どころか酒も飲んでるよ。それなのに金を要求されてサラ金でも借りて今まで百五十万払つた。だけど、仕事ができないからつてさらに一百万。その親父が貸しビルも持つてるとかで。この間俺の勤めてる居酒屋にやつて來たんだ」

大事な息子に怪我をさせた上に、息子の仕事ができなくなつたらその保証金を出せというのだ。金はないから待つてくれるようになつたといふ。その社長は連れてきた男たちに店で暴れさせ、脅しを掛けたといふ。店長はすぐに正勝を辞めさせ、一度と来ないでくれと追い出されたというわけだ。

「それで、弟さんが死んだというのはどういうことですか」

「ええ、行方不明だからと警察に行きました。すると、一週間ほどして、警察から電話がかかつて来て焼身自殺した遺体が見つかったって」

着衣や、時計、靴、運転免許証も弟のものだつたといふ。車のそばには遺書も残されていて弟の筆跡だつたそつだ。差し出された遺書にはこう書いてあつた。

「姉さん、もう生きていくのが嫌になりました。『じめんなさい』確かに弟の字だという。

「うーん、それなのに、生きてるというのばどつこつ根拠があつて」「ええ、電話がかかってきたんです。姉さんって」「新聞にも出た後だつたからおかしいと思って、警察に行つたんです。でも、証拠がなくしかもいたずら電話かもしれないと言われて」だが、佐木田は首をかしげた。

もしも弟が死んでいないのなら、死んだのは誰なんだろうと。弟を生かしておく必要が誰にあるんだろう。弟の狂言なのか。

「お金はここに一十万あります。もし見つかつたら、せらりと一十万お支払いします。交通費など十万お渡しします。これで見つけてもらえませんか。貯金はこれしかないので」

佐木田は花絵を見つめて、わかりましたと言つて受け取つた。

花絵が帰ると、久ちゃんがすり寄つて来た。
「英ちゃん、引きつけてくれてありがとう。続きする?」「うーん、その気はなくなつた。金のために働くぞ。じゃな」「意地悪ー」

佐木田はドアを閉めて、トントンと階段を下りて行つた。

第一章

佐木田が向かったのは藤原組長の事務所。組長はこの裏社会にどっぷり漬かってはいるが、昔堅気のやくざでいきつけの喫茶店「梓」の常連客だ。ときどき情報を教えてくれるので、スリーエヌ事務所としては報酬を払わなければいけないくらいだが、そこはお互い大人の付き合いがあるとしたものだ。

「こんにちは、組長いる?」

「ああ、佐木田さん。組長は昨日から病院です
答えたのは若頭の遠藤だ。

「どうしたんですか」

「盲腸ですよ。早く病院に行けばよかったですのに我慢してしまって腹膜になりそうでしたよ」

「それは大変だったね、どこの病院?」

「あの高橋病院です」

「え? あそこだけはイヤだって言つてたのに」

「ええ、でも、急だつたんで仕方なしに」

高橋病院の院長は組長の同級生で、お互いが頭が悪いこと悪態をつくほどの友だちなのだ。

「それで、いつ頃退院できるの?」

「院長は四日ほどという話でしたが、組長は保険で稼ぐって

「ははは、流石によく考えてるなあ。じゃあ、面会はできるのかい

?」

「ええ、明日なら

「ありがとう、明日花束を持って行くわ

「ありがとうございます」

事務所を出ようととしてふと引き返した佐木田。

「ねえ、この人知らない?」

花絵から預かった写真を見せた。

「若造ですね。なんかやらかしたんですね？」

「うん、死んだことになってるんだけど」

「とううことは生きてるってことですか」

「うん、そうらしい」

「うけの若いもんに当たってみましょつか」

「お願いできるかな」

「お安いご用ですよ」

佐木田は正勝の名前も後ろに書いて渡した。

事務所を出ると、梓に行つた。まだ、朝から何も口に入れていなかつた。

梓は挽きたての「コーヒーの匂い」が店に充満していた。ママの梓は手際よく卵トーストを作つていて。

「ママ、僕もモーニングちょうだい」

「ごめん、英ちゃん。今日はトーストがこれで最後のよ

「えーっ、僕の分取つてくれてないの」

佐木田は怒つたようだ。

「だつて、大学生のアメフトクラブがいっぱいやって来てね。さつき帰つたんだけどモーニングのお代わりつてみんなが食べちゃつて」「学生がこんな喫茶店に来ちゃ困るー。一人一食だろつ、普通はー。」意味不明な事を言う佐木田。

すると、ママは「ほりそりクロワッサンを出した。

「これでもいいかしら、どうぞ」

「お、クロワッサンか」

途端に機嫌が直る佐木田。

「昨日、デパ地下で買ったのよ

「コーヒーとゆで卵も差し出すママ。

「野菜サラダも無くなつたけど」

「いやあ、これだけで十分さ。ママは俺に惚れてるね」

それには答えず、洗い物をし始める。そこへえりちゃんが帰つて

来た。このえりちゃんは先月から梓でバイトをしている女子大生。朝十一時までのバイトだ。モーニングを近くの店に届けに行つていたらしい。

「佐木田さん、おはようございます」

「お、えりちゃん、いつもいても可愛いねえ」

話は半分に聞いておきますと言われてしまつた佐木田。ママは笑つている。

佐木田はコーヒーを飲み終わると、スリー・エス事務所を開けた。

住宅兼事務所なので、いつでも開いていると言えばそうだが、一応気分的なものだ。

机には配つてと頼まれてるティッシュが山盛り。

これは梓の入り口にも置いている。どこで配りうると構わないのだ。隣のパチンコ屋にも置かせてもらつて。それで金を取るのかと言われそうだが、それでもいいのだ。サラ金のティッシュペーパーなんてそんなものだ。

ティッシュで思い切り涙をかむと、電話が鳴つた。

「もしもし、スリー・エス事務所です」

「あの、うちのミーコがいないのよ」

「ああ、寺田さん。また逃げましたか」

近くのばあさんの飼い猫だ。あちこちに子どもを作る浮氣な猫だ。もともと野良猫だったものだから、ばあさんは飼い猫と思つていても、ミーコにしては全くその気はないのかもしない。だが、この猫を見つけて連れて行くと一万円なのだ。高い料金設定は人を見て決める佐木田だ。このばあさんの頼み事は寺田宝石店に請求することになつていて。嫁はエステ通いでばあさんを疎んじて、もともとは同居していたのに別のマンションを借りたのだった。夫は若い妻に何も言えず、金で繋ぎとめてるようなものだ。だから、佐木田はこのばあさんの依頼は快く受け、金はしつかり受け取るのだ。

きっとあそこの公園だなと田星をつけて自転車で行く。

「いろいろな依頼を一手に引き受けます」腕だな」
自分で自分を褒めるしかない。

Γ / \ / - Γ

ミーハーの声がする。

捨て猫を連れて歩くハーロ。オスなのでハーロと名付けられた猫は誰猫を連れて出てやがれ。

「おい、また相手が違うぞ」

「ハル、一の学園組合

そう言いながら自転車のかごに乗せる。

持ってきたシーチキンの缶詰を開けて、雌猫に渡すと、「——かみやー」と鳴いた。まるで礼を言つてゐるようだ。

佐木田は寺田宝石店にはこの缶詰の値段を三千円と報告すること

に決めた。

翌日、寺田宝石店から電話があった。

「もしもし、佐木田さん、寺田です」

「はいども」

あの缶詰が高いって言つのかなあと少し姿勢を正して、受話器を持ち換える。

「あの、母のことではなくて、頼みたいことがあるんですが」

「えつ、なんかあつたんですか」

「ええ、ちょっと電話では」

「では、後で伺います」

そうか、宝石店の依頼ならかなりの料金が見込めるなと佐木田は取らぬ狸の皮算用だ。

すると、ケータイも鳴る。

「あの、矢野花絵です」

「あ、花絵さんですか。まだ、捜査中で」

「ええ、いいんです。私、明日から大阪へ行くので報告だけしておこうと思いまして」

「あ、そうですか。旅行ですか」

「ええ、まあ」

「お気をつけて」

電話は切れた。別に放つてゐるわけではない。若頭にも頼んでいるし、今日は居酒屋へも行く予定だつた。だが、花絵は待つているんだろうなあと思つと、佐木田は腰をあげた。

まずは、寺田宝石店だ。

最近改装して若い子も入るよつになつた店だ。店内はブランドの宝石が主流だ。夜の蝶が日那に買つてもらつことが多いから値段もなかなかハイレベル。かといつてお手頃の若向きのデザインも置いてある。寺田宝石店はこの不景気の中、結構儲かつてゐるようだか

ら、あの男は経営手腕はなかなかのものかもしれない。

ガラス張りの大きなドアを開けると、紺の制服を着て白い手袋をした売り子が白髪の老紳士に金の大きなブローチを見せていくところだった。

「いらっしゃいませ」

寺田は佐木田を見ると、笑顔で近寄つて来た。

「すみませんね、わざわざお越しただいて」

「いいえ、繁盛しているみたいですね」

「そんなことありません」

そう言いながら佐木田を奥の部屋へ通した。

大理石の床に高そうなソファ、大きなサイドボードにはコレクションの腕時計が並んでいる。

「ほう、ロレックスがいつぱいだな」

佐木田はこうこうものには全く興味がなかつたが、一応は羨ましそうぶりも見せる。

「実は家内が家を出まして」

「え、家出ということですか」

「まだ、そこまでは」

「こつからですか」

「昨日です」

「あ、それじゃ、まだわかりませんね。飲み過ぎてどこかのホテルに泊まつてるかもしれないし」

「ええ、そういうことも考えられますが」

「でも、家出だと思うのですね」

佐木田は寺田の顔を見ながら聞いた。ときどきため息をつきながら話す寺田は、五十歳になつて初めて結婚したのだった。結構女にはモテると思うが、縁がなかつたのかそれとも世間体だけで結婚したのか。そう考えるのには噂があつたからだ。寺田宝石店の息子は男好きだといふ噂。

必死になつて母親が見合いを勧めたが、どれも断つて困るといつ話は梓で聞いたことがあつた。

だが、結婚してからはあの奥さんと仲良くなつてゐるから、男好きではなかつたのねとママも言つてたつけ。

ぼうつとそんなことを考へていると、寺田は立ち上がりて一枚の紙を出した。

「これ見てください」

それは妻からの離婚届だつた。

「もう判も押してます。でも、そんな話全く出たことがなかつたんですね。信じられません」

「これはどこに?」

「家のクローゼットの中に」

よく見ると、日付は書かれていない。といつことばにつのことか分からぬわけだ。

「奥さんの方にそんな気持ちがあつたといつことですかね。ちよつといろいろ調べるのに交通費と通信費用がかかります。その分は先に二十万預かります。雑費などもかかりますがいいですか。こういう調査は諸経費が随分と掛かりますけど」

すると、寺田は引き出しの中から百万の札束を出した。

「取りあえず、これだけ先にお渡しします」

佐木田はわかりましたと黙に収めると宝石店を後にした。これだから寺田宝石店とは縁が切れない。ミーハーより難しい調査だが、何だかきな臭い匂いがすると感じていた。

次は居酒屋だつた。そこは正勝が働いていた場所だ。店内は大漁旗が飾られて魚のプラスチック模型があちらこちらからぶら下がり、若者が喜びそうな雰囲気だつた。値段は安く威勢のいい店員が大勢いた。

「店長はいますか」

席に座ると生ビールを頼みながら、佐木田は尋ねた。

「はい、何か御用ですか」

「ああ、ちょっと話があるんで呼んでくれるかな。それと、枝豆頂戴」

「はい、生一丁、枝豆一丁」

大きな声でカウンターに叫ぶ。そして、奥に入つて行つた。奥から少し胡散臭そうに佐木田を見る男がいる。

「あれが店長か」

佐木田は手を上げた。店長は仕方なくやつて來た。

「いらっしゃいませ。どうこう用でしようか」

「バイトにいた矢野君、正勝君のことだけど」

「あの子はうちとはもう関わりがございません」

そう言つて困つたように顔をしかめる。

「いやいや、違うんだ。いややもんを付けにきたんじゃないよ。お姉さんに頼まれたんだ」

「は？」

「矢野花絵さん。弟を探してほしつて」

「でも、あの子はこの前焼身自殺したとか」

「うん、らしいね。でも生きてるかもしないんだ」

ぎょっとした表情で見つめる店長。ネームプレートには中田と書いてある。

「中田さん、矢野君と連絡した？」

「どうしてですか。死んだと聞いてから一切会つてませんよ」

「そうか、でも、忘れてるかもしないじゃないじゃない。思い出したことあつたらここに連絡して」

そう言つて佐木田はパソコンで作った名刺を渡した。

「スリー・エス事務所ですか」

「うん、僕が所長。まあ、僕しかいないんだけど」

そう言つてビールをもう一杯と注文した。店長はじつと名刺を見ながら警察じゃないんですねと呟いた。

佐木田が居酒屋を出ると、すでにこの街は夜の華やかな顔になっていた。

若い女のミュールの音がせわしなく聞こえる。

若い男たちはコンパの帰りなのか、あちらこちらで女性に行こうと声を掛けている。大体その中で無口な男が一人はいるもんだ。その男の周りには女子が集まる。不思議な光景だ。欲しがつてるのは同じだが、声に出すか出さないかで信頼度が変わるのが。

事務所に戻ると、若頭の遠藤がやつて来た。

「あ、どうも。佐木田さん、この前の写真だけ」

「ああ、遠藤さん。何か掴めましたか」

遠藤は派手なアロハに白いパンツ。金のネックレスがいかにも夜の帝王という感じだ。その赤いアロハのポケットから出した写真。「え、この子の隣にいるのがさおりって子でね、その女の子と仲が良かつたという話なんだ」

「さおりって、どこの店の子ですか」

「うん、海賊の家って知ってるでしょ」

「あの派手なソープ」

「そう、そこのご指名ナンバーワンの子」

「へえ、また後ろにやばいのがいそうだな」

「うん、このさおりと正勝がどうも付き合つていたらしいんだけど。金の無い正勝にムリだわ」

遠藤の話は分かりやすかった。正勝はさおりとできていたようだが、店での指名がナンバーワンとなれば、例の交通事故の怪しい親子が関わってきたそうだ。

「その正勝の事故った相手は野沢良太つていうらしいんですけど、そいつの話も聞いてませんか」

「それよ、その野沢の父親が地上げ屋で有名な野沢コーヒー・ポレーショ

ンセ

「ああ、あれですか」

評判がよくなくて、藤原組長は大嫌いな奴となるべく関わりを持たないようにしているところ。やくざの中でもよくない奴というのが気にかかるが。

「とんでもない野郎に引っかかったという話だな」

「それなら、そのあたりはソープに行けば会えるんですか」「それが姿が見えないということで、野沢新太が探してるんだよ。女と逃げるために死んだことこしたことしたんじゃないかな」

駆け落ちか。

男の嫉妬ほど醜いものはないが、どうもその線が怪しいよつだ。さおりと正勝の接点とはどこからか。

遠藤に礼を言いながら、棚の奥から酒を一本取り出した。

「これ、この前貰つたもんだけど、どうぞ」「どうぞ」

「いやいや、こんなことぐらいで貰つちや組長に叱られるよ

「いいじゃないですか。貰いもので悪いけど」

にっこり笑つて遠藤は受け取ると、事務所を出て行つた。

花絵に電話をしたが、花絵の電話は電源が切れていた。

「大阪に行くつて言つてたな」

さおりのことを聞いていないだらうか。聞いてみたいと思つた。僅かな光が見えてきたようだ。

事務所の窓から見ると、喫茶梓の光が見えた。

「まだ、開いてるのか。なんか食べに行こつか」

事務所のシャッターを閉めると、梓に向かつた。

梓はママが一人で煙草を吸いながら、水割りを飲んでいた。

「どうしたんだい、こんな夜まで」

「うん、最近、経営が厳しくてね、ちょっと憂鬱になつて」

「それで、一人で飲んでいたら、余計に店は傾くよ」

そう言わると、ママはおかしそうに笑つた。

「英ちゃん、何飲む?」

「ピール」

「仕事はどうなの」

「繁盛してね。寺田の奥さん、見たことないかい」「あの若奥さん、そいつればホテルの通販パーティーに来てたらしいわよ」

「こいつの」と

「昨日だと思つた。うちにも葉書が来てた」

テレビの通販でおなじみの会社だ。宝石やファッショング、靴に置物、何でもあります。栄養食品、ダイエット器具まである。梓のママは最近、ウエストが細くなるとこつロープのやつなものを四九〇〇円で買つたらしい。

「ママもよく買つの」

「うん、店が終わつてから見れるものつて、一回ぐらこよ。一四時間放送だから結構面白いのよ」

「そんなものかねえ。寺田の奥さんも」れのお得意さんつてことか」「うん、ここへ来る江田青果の奥さんが寺田さんを見たつて言つてたもん」

「すごいねえ。みんな行つてるのか」

「それがね、寺田さんはブラックのカードで買こまへつてたりしきの」

「ほら、『ピール』のやうに上か。金持ちだなあ」「私も買いたいわ。英ちゃん、何が買つて」

「僕を売るから買つてよ」

「いやよ、どうせみんなにそんなこと言つてるんでしょ?」

酔つたママは魅力的だ。ついついからかいたくなる。

肩に手を回そうとしたとき、ママはすつと立ち上がつた。

「そうだ、英ちゃん。いいものがある」

「なんだよ、ママの方がいいのになあ」

冷蔵庫を覗きこんだママは小さな器を取り出した。

野沢菜だ。

「野沢菜茶漬け食べるでしょ」

「つまそうだな」

「ママは手際よく作つていいく。そこへ石上刑事がやつて來た。」

「一人だけで何してるんだい」

「あら、石ちゃんもたべるでしょ。お茶漬け」

「つまそうだな」

石上刑事もここに常連客だつた。まつちやつしてテレビのタレン

トにそつくりだから石ちゃんと呼ばれていた。

佐木田はグラスを取つて、石上にビールを注いだ。

「ちょっと聞いてほしいことがあるんだ、石ちゃんに」

「佐木田さんの話はいつも怖いよ」

石上は笑いながらビールを一息で飲み干した。

石上刑事と別れて事務所に戻ると、久ちゃんが青い顔して息を切らしてやって來た。

「英ちゃん！ いる？」

「なんだよ、そんな大声出して」

「今、うちの店に男が来て、すみれを出せって怒鳴つてゐる。慌てて裏口から來た」

「よし」

佐木田はジャンパーを手に取ると、階段を駆け下りて久ちゃんの勤め先に走つた。

フランワーガーデンという店は三百メートルほど先にある。少し安い感じのするテナントビルの一階で四人の女の子が働いてゐる。雇われママは氣風のいい五〇代。

若い男が一人でママを脅してゐる。

佐木田が一人の前に立つと、上から下まで值踏みするかのように見る。

「おい、この間に入つてくるとはい度胸じゃないか」

「ああ、僕はこの店の用心棒なんだよ」

「何だと、こんな瘦せた用心棒がいたのか」

後ろから入つて來た久ちゃんが怒鳴る。

「何言つてゐるよ、この人は片つ端から投げ飛ばすほど強いのよ」

佐木田は思わず苦笑いしながら男たちに近づいた。

「あのね、どこの誰かさんは知らないけど、僕は佐木田英輔つて言つて逃げも隠れもしないよ」

すると、入口から藤原組の遠藤が入つて來た。

「おや、にぎやかな店がどうしたんだい。静かじゃないか」

「ビビつたのか、若い男は若頭の遠藤を知つてゐるようだ。」

「あ、遠藤さん。どうも」

「どうしたんだ、お前たちはどうの組のもんだ」

「あ、いや、組ではありません」

「あ、なんたら「ホールドレッション」の社員じゃないのか。その小指貰つことになるかもよ」

慌てる男たち。す、ぐむことも忘れて逃げて行つた。

佐木田はどうもすみませんと遠藤に頭を下げた。

遠藤は隣の店のマージャン店で遊んでいたところ、佐木田や久ちゃんが血相変えて入るのを入口から見たという。

「佐木田さんの腕に任せておいた方がいいかと思つたけどね」

「いやいや、どうも。用心棒なんて口から出まかせ言つたものだから、やつとしていたんです」

久ちゃんもため息をつきながら、ママの方にもたれた。

「本当に殴られたらどうしようかって心配だったわ」

「よく言つよ。俺が殴られそうになることばかり言つから。久ちゃん困るよ。それにしても花絵さんをどうするつもりなんだろ？」遠藤は佐木田の方を向いて花絵さんはどうしているんだと尋ねた。大阪へ行く話を聞いているが、店の者は誰も知らなかつた。久ちゃんでさえも聞いていないという。

佐木田は遠藤に一杯奢ると、久ちゃんに花絵の住所を教えてもらつた。

花絵が住んでるのは飯田橋だつた。

翌日、佐木田は飯田橋に向かつた。

地下鉄の駅から十分ほど歩いて「コンビニの角を曲がると、単身用マンションがある。その四階に住んでいるということだった。古いマンションは四階なのにエレベーターがない。階段を歩きに行くしかないのだ。昨日の遠藤と飲んだ酒が体を重くしていた。

矢野と小さく書かれたプラスチックのプレートが貼つてある。呼び鈴を押す。いないはずだから押しても無駄とも思つたが、意外なことにドアが開いた。

中から出てきたのは若い女だった。

「誰？」

「あ、佐木田英輔と言います。矢野さんのお宅ですよね」

「ええ、今いません」

すぐにドアを閉めようとすると、靴のつま先を入れた佐木田。ドアが閉まらないことに恐怖の表情を見せる女。

「ねえ、警察を呼びますよ」

「その方がいいと思うよ。君、怖がってるから。僕は花絵さんから弟のことを調べてつて頼まれたんだよ。ひょっとして、君はさおりさん？」

大きな田をますます大きくしてじつと佐木田を見つめる女。

やがて、ドアを開いて佐木田を中に入れた。

その部屋は綺麗に整頓されていて、女の一人暮らしらしく花も飾つてあつた。

佐木田は自分が便利屋家業の事務所を開いていて、矢野花絵に頼まれた話をした。女はやはりさおりといい、ソープで働いていたと話した。正勝はどこにいるのかと尋ねたが、首を振つて知らないと答えた。

「花絵さんは大阪なんだろ」

「ええ、まーちゃんが大阪で捕まつたつていつから出かけて行つた」「そんな警察の話は聞いてないけどなあ」

「捕まつたのは警察にじやない」

そう言うとさおりは静かに立ち上がり、ファンシーケースを開けた。花絵の衣装がぶら下がつてゐるが一番奥に一枚の上着が見えた。男物だ。

さおりはそれを取り出すと佐木田に見せた。

「見て」

差し出した服は少し硝煙の匂いがした。作業着のようでよく見ると、左の胸ポケットに穴が開いている。撃たれたのか。だが血が噴き出た様子もない。ただ、少しだけ裾に血がついていた。

「「」の服は正勝のか？」

頷くさおり。

「一人でいた大久保のアパートの入口にこれがノブにぶらさがっていて。まーちゃんが教えてくれていたお姉さんの所へ昨日来たの「正勝はどうした」

「それが待つても連絡が来なくて。そしたらお姉さんのケータイに大阪へ来いって。まーちゃんを預かってるから一人で来いって「誰からの電話だ」

激しく首を振るさおり。顔色が悪く血管が浮き出るような白い肌だ。

「君は何か食べているか」「何も食べたくない」

佐木田は立ち上がると、冷蔵庫の中を覗いた。卵と醤油と花ガツオがある。炊飯器は昨日からそのままのようだ。釜に茶碗一杯程のご飯が残っていた。手際良く卵雑炊を作ると、さおりに差し出した。「美味しそう」

「ああ、うまいよ。食べて」「じらん」とおりはすずつと雑炊をすすると、笑顔になつた。「子どもができるんだろ」とおりの箸が止まつた。

さおりはお腹をかばうよつとして、佐木田を見つめた。

「今、どれぐらいなんだい」

「三ヵ月、悪阻がひどくて」

「まあ、ゆつくり食べて。何か食べないとお腹の子に障るよ」

「うん」

さおりは顔を上げて咳くよつと言つた。

「まーちゃんは優しいから、こんな仕事をしている私にも普通の女の子として扱つてくれたの。仕事で知り合つたのに足を洗えつて好きになつたらそんなものだろう。正勝も若い男なんだから。でも、そんなことどうして分かつたの。まだ、お腹も出でないのに」

「いや、その机の上の薬」

机の上に産婦人科の薬があつた。

「ああ、なんだ。すごいつて思つたのに」

「具合が悪いのか」

「あんまり食べられないし、悪阻がひどいから下腹が張つて来ちゃつて。流産しそうになつて」

「ふーん、そうか。大事にしろよ」

「うん」

佐木田の言葉に笑顔で応えるさおり。

正勝の服を石上刑事に渡す事に決めた。自分で手に負えない事件になりそうだと佐木田は考えた。一体どこへ行つたのか。この一人はどこにいたんだ。

拳銃の痕も出てきた以上、この血痕が正勝のものなら命を狙われることになつているようだ。

「焼身自殺なんてしてないんだな」

黙つているさおり。

「なんでもそんなことを計画したんだ。誰の差し金だ」「さおりは窓のまづに顔を向けている。作った雑炊が冷めてしまいそうだ。」

「まずは食べなよ

「うそ

さおりは箸を進める。

女は強い。まだ、若いのに母親になつたといふ意識からか、細い体に何とかして育てようという意志が感じられる。さおりは食べ終わるとほつと大きく息をした。

「花絵さんは一人で行つたのか

「ううん

首を振るさおり。大阪へ行くことを促す電話がかかつて来たのだ。そして、このマンションの下にタクシーが止まつていたといふ。中には誰かいるようで花絵は後部座席の人と話をしてから乗つたといふ。

「（）に君がいる」とは

「誰も知らないはず。タクシーが来た時もお姉さんはすぐ下りて行つたから」

さおりは疲れているようなので、佐木田は寝るよつて言つと、石上といふ刑事以外は誰が来ても開けてはいけないと言つた。

「警察に話したら、私たち捕まっちゃうの

「今はとにかくゆっくり休め」

佐木田は正勝の服を手に取ると、部屋を後にした。さおりが部屋のかぎを閉める音を聞くと足早に階段を下りた。

マンションを出ると、佐木田は石上に連絡した。

午前十一時「ひ、喫茶店梓には久しぶりに藤原組長がやつてきた。

「あら、もういいの？」

ママが声を掛けた。組長は少し色が白くなつていて、どう見ても静かな技術者のような雰囲気だ。とても組長には見えない。

「ええ、お久しぶり。ここ」のコーヒーが飲みたくてねえ」「嬉しいこと言つてくれるじゃない」「えりちゃんが水を入れて差し出す。

「お待ちしました」

「おお、えりちゃん。もう、仕事は終わりかい」

「ええ、今から学校です。」

「バイト時間は午前中だけ。えりちゃんは大学の授業があるりしく、今日は荷物がいっぱいだった。」

「何をそんなに持つて行くんだい」

「今日はパソコンがいるの」

「そうか、大変だな」

「今度パソコンについて教えてください」

「それには答えず、いつておいでと組長は優しく言つた。えりちゃんが出ていくと、入れ違いに久ちゃんがやって来た。

「あら、珍しい。どうしたの」

「英ちゃんはまだ来てないの」

「ええ、今日はまだよ」

「そう言つと久ちゃんはメモをママに渡した。そこにはケータイ番号が書いてある。」

「ここに電話するみづみづのね」

「ええ、さつき花絵さんから新しい番号だつて、でもすぐ電話が切れ。話の中になんか嫌な予感がして」

「久ちゃんが電話したらいいのに。佐木田さんに」

「それがケータイ落としちやつて」

「久ちゃんは防水になつてないケータイをトイレに落としたと言つて、佐木田の電話番号がわからないと困つていた。」

「ママは自分のケータイを渡すと、佐木田の番号を見せた。」

「ほら、これから掛けたらしいわ。急いだ方がいいから」

「久ちゃんはありがとうと言つと佐木田に連絡した。」

「あ、英ちゃん、私。あのね……」

久ちゃんの話し方はやはり女の匂いがした。梓ママは一人が仲がいいのは知っていたが、いざ、その電話の口のきき方に少しの嫉妬を感じた。

そして、今日のモーニングは決して取つておいてやらないと心に決めた。

残っていたパンを藤原組長に「おまけよ」と言つて差し出した。

ここは大阪南港。
たくさんの倉庫群の一角に、野沢コーポレーションの倉庫があつた。

夜の倉庫周辺は速さに浮かれた若者たちが走り回る。その中に高田雷太^{かだらいた}がいた。この男は高校生だつたが、父親の借金による蒸発から母と姉と三人が残された。高校へ行く金は無くなり、姉は大学を辞めて夜の接客業についた。母親はビルの清掃業の口を見つけてきたが、慣れない仕事に病気になり寝たり起きたりの日々だ。

雷太は初めてこそ眞面目に定時制に通うと決めていたが、昼間の仕事の疲れや鬱憤からついに暴走族の友だちができた。オートバイは無いから乗せてもらうばかりだつたが、ついに盗むことを覚えてしまつた。それらは解体しいる部品は売り飛ばし、自分のバイクとして改造していった。

初めは五十CCCだつたバイクも、欲望が次から次へと浮かんで、いつの間にか一百五十を乗るようになつていて。ただし、それらは盗品をさばく輩から売り買いするという悪の連鎖みたいなものだ。ただの野次馬から今では盗品を扱う暴力団の下つ端となつて働いているのだった。

夜の帳が下りるとぞろぞろ集まつて走り回る。

「雷太、いい加減にしなさい。あんたも働いてここ^{ここ}の家賃ぐらい入れてよ」

「うつせえな、俺は好きなように生きるんだよ」

「じゃ、ここから出ていきなよ。あんたを食べさせる理由はないよ」

「毎日毎日^{さつき}小言ばかり言つな」

姉の五月はイライラしていた。自分ばかりが酔つた男に体を触られながら飲めない酒を飲んでいるのに、この弟はそんな私に寄生しているのだと。昔はあんなに可愛かったのに、今ではどこで何をし

ているのか。あのバイクは盗品ではないのだろうか。

問い合わせてもへらへらするか、無視するか、弟はのらりくらりとかわすだけだ。この雰囲気はいつも飲みに来るやぐざの男たちと似ている。

仲間も眉を抜いてる奴や、金髪で刺青をしているような、まともとは思えない野郎ばかりだ。最近ではこの五月にじょつかいを出す男もいる。

五月は背も高くスタイルがよく、ロングヘアが適度にカールしていて、雷太の自慢の姉貴だった。頭もよく文芸部の部長だったことからいろいろな高校の作品コンクールには名前を連ねる常勝者だった。大学も関西では名の通つた私立に行つてだが、父親の会社が倒産したことで全てが台無しになつた。母親はお嬢さんで育つたため、今まで勤めた経験もなく体も丈夫でなかつた。強く生きると口では言つてもそつとできずにいた。ついにはストレスからかうつ病になつたのだ。

「おい、雷太ー」

外から呼ぶ仲間。

「近所にみつともないから大声を出さないよつに言ひなさいよ」

母親が寝床から言つ。

五月は着替えて働きに行く準備をする。短い丈に思い切り胸の開いた赤いワンピース。赤いピンヒール。見事に着こなす。真っ赤な口紅を差すとエナメルのバッグを肩から下げてドアを開けた。

「によつ、五月ちゃん。いいねえ」

口笛が響く中を睨みつけながら歩く五月。

その中でもひと際五月に熱い視線を送る男がいた。雷太に盗品の受け渡しを教えた平井新太郎だ。

五月の後姿を見送ると、雷太にこいつ言つた。

「おい、雷太。この間のマフラーの金、もういいよ

「えつ、くれるんですか」

「ああ、その代わり、一度姉貴とデートをせろや」

雷太の顔が青ざめていく。

この男がデートだけで終わるわけがないことを知っていた。

以前、公園でデートしていた男女を見つけたとき、新太郎は男をいきなり殴り飛ばして、女を奪った。雷太は気を失った男から財布を抜き取り、新太郎の後を追つた。

雷太は新太郎が見張つてると野沢コーポレーションの倉庫の前に立たされた。

中から聞こえる女の泣き声とときどき叩く平手の音。

うめくような声。

三十分ほど経つと、新太郎は出てきて雷太にもやれと言った。倉庫の中には衣服を破られ放心状態の女。目には青いあざ。乳房には歯型があった。下半身を手で隠すことも忘れるほど、女は汚されていった。血で汚れているショーツを渡すと、女はうつろな目で呟いた。

「一生忘れない。殺してやる」

それを聞くと、雷太は殺される前に「うしてやる」と狂氣にも似た意識が生まれ女を倒した。

獣のように抱いて事を済ませると、女を置き去りにして二人は出て行つた。翌日の新聞に何か出るかと思ったが一切出なかつた。縛り上げた男のことも書かれてはいなかつた。

女がどうなつたのか、その後のことは一週間もしないうちに忘れてしまつた。

そんな新太郎が五月に興味があるといつことは、あの光景が頭に浮かんでくる。

「新太郎さん、それはちょっと。姉貴も仕事あるし」

「何だよ、じゃ、マフラーの金二十万、明日までに届けろよ」

「そんな、あれば五万つて話じゃ……」

「できねえよ、割り引くなんて。俺だつて仕事なんだから」

新太郎の目が怪しく光る。

雷太は分かつていたはずだ。いつか、こんな仲間とつるんでいた

ら碌な事にはならないと。

だが、そんな雷太を楽しむように新太郎は言った。

「いいよ。五月ちゃんのデートは映画だけだからさ」

「ホントに映画だけですよ」

「ああ、仕方ねえな、弟分の姉貴なんだから」

雷太はホッとした顔を見せたが、新太郎は舌なめずりをしていた。

寺田祥子てらだじょうこは中野のマンションにいた。
 「いつまでもこんな関係続くわけないわ」
 一時のきまぐれで付き合つた中田宏なかたひろし。
 居酒屋を経営している。

ふと、立ち寄つたジャズバーでばつたり会つた高校の同級生。今は金持ちの綺麗な女。祥子は気が強く昔からはつきりと物を言うタイプの女だつた。そこが魅力的で昔から男たちにモテていた。今は宝石店の奥様になつてゐるようだが、家庭生活が面白くないのかジャズバーで一人で酒を飲んでいた。

「お、祥子じゃないか」

「えつ、中田君じゃない」

久しぶりにクラスメートに会つた懐かしさから話が弾んだ。楽しくてつい誘つたが、祥子は積極的な女だつた。シャワーを浴びていると中田の後ろから抱いて来る。

「おい、洗えないじゃないか」

「私がしてあげる」

祥子は石鹼をつけると中田の体に自分を押しつけてきた。

中田は結婚したことがあつたが、何となくうまくいかなくなつて三年前に離婚した。一人が忙しかつたからなのか、一緒にいることがほとんどなく、お互いががセックスにも興味をしめさなくなり自然消滅のような離婚だつた。

だが、この祥子はどうだ。

夫がいるというのに、一人で酒を飲みしかもあつけらかんとしたセックスをする。その何とも言えない魅力に中田は惹かれた。気楽な不倫だと思つていた。それはお互いががわかつていていたはずだ。だが、それがずれたのはある男に見られたことだつた。

矢野正勝だつた。

正勝は車の当たり屋詐欺にあつたようだつた。店じまいをして帰る前に中田に話しかけてきた。

「店長、金を貸してください」

「もづ、いい加減にしろよ、給料前借しただろ」

「これで最後ですか」

「ムリだよ」

突つぱねたら正勝は思いがけないことを言つた。

「分かりました。店長が付き合つてゐる人、寺田宝石店の奥さんですよね」

中田はぎょっとした。

「お前、何をするつもりだ」

「いや、何でもないですけど。寺田宝石店の主人が知つたらただでは済まないんじやないですか」

恐怖だつた。中田は一瞬ひるんだ目をしたのだろう。

正勝は続けてこう言つた。

「あと少しだけでも用立ててください」

正勝の眼は必死だつた。どうも外に誰かいるのだろうか、時々入口の方を見る。

「これで終わりだ。明日からもう来るな」

そう言つて握らせたのは一十万だ。

「ありがとう」れこます」

正勝はそう言つと、入口を出て誰かと話してゐるようだつた。

中田は不安だつた。

いつ、また同じことを言つてこの男が来るのではないかと。前掛けの紐を強く握りしめた。

居酒屋の明かりを消すと、祥子にメールをした。

「今すぐ会いたい」

この日の中田は変わつていた。

祥子は中田の眼が光っているのを認めると、少し微笑んだ。

「今日は獣の眼になつてゐるのね」

すると、その言葉を言つて終わらないうちに、中田は祥子の服をはぎ取つた。

祥子の肩に歯を立てた。

荒くすればするほど、祥子は興味津々といつそぶりを見せた。

舌なめずりをする祥子の顔は、まるで妖しい生き物のよつだつた。

夜の闇の中どうじめく一人。

息。

きしめぐベッヂ。

粘着質の音。

うめあ音。

時間は止まらない。

中田はその時思った。

地獄に落ちていぐ。

祥子は地獄の案内人か。

そう思いながらも体を離せない。

「この手、この口、この秘部を知つたからこそ、もう一度と抜けられない。

もう思つと強く乳首を噛んだ。

悲鳴をあげながらも、祥子は止めてとは言わなかった。

「これを飲んで」

そう告げると、祥子は薬を一錠中田に口移しで渡した。何分も経たないうちに、中田はよみがえってきた。

果てたはずの体に英気が漲る。
遠のく意識の中で、祥子が覆いかぶさつて来る。

感じたことのない感覚。

全でが黑白の色の無い世界。

祥子の吐息が心地よく天国にいざなうようだ。

中田は呟いた。

「俺たちは落ちていへ。地獄の底に」

祥子はよく分からぬことを呟いていた。

「あなたのものは私のもの。私の体は……」

朝になつても祥子は帰らなかつた。
中田も起きられなかつた。

「一体、あの薬はなんだよ」

「元気になる薬。一度試してみたかったの」「ヤバいんじやないか。麻薬じやないのか」「いいじやない、一度くらいじや中毒にもならないわ」

祥子の言葉にせうだうつかと不安な気持ちを隠せなかつたが、あの感覚を忘れることはできそつもなかつた。

「ねえ、もつ一回分残つてね」

やつは祥子は、ベッドから起きあがりバッグから薬を取り出した。

「わいわいおひや

ヒヤツヒヤツ祥子の頭に轟がれた。

中田はマンションから祥子が出ていくのを見送った。居酒屋を始めてからは止めていた煙草に火をつけた。祥子が置いていったものだ。

何だかふらふらする。

やり過ぎると世界が黄色になるって誰かが言つてたな。そんなことはないんだ。

ふと、可笑しくなつた。笑うと煙が気管に入つてむせてしまつ。

久しぶりの煙草は美味しかつた。

料理の味に響くと、今まで止めていた煙草。

「ただの居酒屋にそんなもの客は望んでないかもな」

何もかも鬱陶しい。

思い出すだけでも腹が立つ。あのときの正勝。

誰が勤め先を世話してやつたんだよ。

くそつ、人を脅すような真似をしやがつて。

中田は面白くなかった。

使つたティッシュが汚らしく散乱している部屋。

あいつがいると碌なことはない。

「誰かが殺してくれるといいのに」

ふと呟いて、自分でも驚いた。

慌てて煙草の火を消す。

人を殺すなんてこと、想像したこともなかつた。

だが、一日続けて飲んだ薬のせいなのか、妙に自分が大きく見える。

才能が埋もれているように感じる。

社会はもつと俺を受け入れるべきだ。
不遜な考えが頭を占めていく。

小さな居酒屋で終わるような俺ではない。

大学のバイトが本業になつちました。

あつという間に店長になり、大学は中退した。

学生相手やサラリーマン相手の店のノウハウを研究した。
どんなものを安く仕入れ、何が喜ばれるか。
だが、ここにこのところの不況で人は家路に着くようになった。
昔のように上司といいやいや飲みに行くこともしないのか。
上司も部下も金もないのか。

そんな中、正勝は俺の車で仕入れに向かつた。いつものように高い葉物野菜を少し遠いが埼玉で安く売つてくれる店を見つけた。
その帰り、野沢良太にぶつけたらしい。

信号のない交差点で二十キロ程度しか出していなかつた。左折し
よつとしたときに走つて渡るうとしたのか良太が飛び出してきたの
だ。

良太はボンネットにドンと乗つたといつ。

驚いた正勝は救急車を呼ぼうとしたが、そのとき良太は父を呼んでくれとケータイを渡した。

馴染の医師に運んでほしいと言われた。それからが正勝の悪夢の始まりだつた。

怪我のお陰で仕事ができないと言われ、金の請求が始まつた。
初めは仕入れで頼んだという思いもあつたが、店に変な男も来る
ようになつた。

貸した金もきつと返つては来ないだろ。

膝を思い切り強く叩くと、中田は立ち上がつた。

祥子は家に戻つていた。

「昨日はどうしたんだ」

「ほら、同窓会で会つた友だちが離婚なんだつて。泣いて訴

えるからついつい聞いてあげていって

「そんなときでも電話ぐらいできるだろ?」

「メールしたわ」

そう言われ、ケータイを見ると確かにメールがあった。
怒りの矛先を持つて行く場もなく、寺田は朝食を作りつつ立ち上がりつた。

「ねえ、私が淹れてあげるわ。コーヒー」

祥子はニコニコと笑うと寺田の肩に手を置いて、エプロンをつけた。
白のフリルのエプロンは祥子がつけると、妙に色っぽくなるのはなぜだろうか。清楚な雰囲気の代表みたいな白のエプロンなのに。卑猥なイメージが湧いてくる。

いい歳をした男がみつともなく嫉妬する。

本当はどこで誰と何をしていたんだ。

問い合わせたくなるような思いをぐっと堪えていた。

だが、祥子はそんな寺田をなだめるかのようにウエッジウッドのカップにブルーマウンテンのコーヒーをいれて差し出した。

「いい香りね」

「ああ」

カップを持つ寺田の人差し指を祥子が触れる。

「あなたの指は長くて素敵」

からめてくる指を払いのけることは到底できないことではない。怒つていたのにもうそんなことはどうでもよくなつてしまふ祥子の指。

「ねえ、お母さんのところへ何を持って行つたら喜ぶかしら」

冷たいようだが、祥子はよく考へてくれているんだ。寺田は祥子を抱きしめた。

「今は梨が出てきたから持つて行つてよ」

「そうするわ」

祥子は笑いながらいひついた。

「あら、もうこんな時間よ。店を開けるんでしょう」

寺田は盛り上がった気持ちのやり場のなさにがっかりしたが、祥

子は「夜のお楽しみ」と耳元で囁いた。

「今度入荷したあのネックレス素敵ね」

「ああ、でもこの前買つてあげたばかりだからな」

「うーん、意地悪」

祥子はふくれつ面をして見せる。

祥子は確信していた。

きっと、今晚、あのペンドントを裸の私につけるはずだわと。

寺田は店のシャッターを開けると、ダイヤのペンドントをショーケースから取り出した。

祥子の喜ぶ顔が見えるようだった。

そして、隣の薬局で値段の高いマムシドリンクを買つてきた。

「あ、社長早いんですね」

「うん、このペンドント。僕が買つよ」

「あり、また奥様ですか。羨ましいわ。そんなに愛されて」

店員はお世辞を言つてゐただが、寺田は上機嫌に笑つた。

久ちゃんから電話をもらつた佐木田。

「嫌な予感がするのよ」

「いつのことなんだ」

「さつきよ。私に新しい番号を教えてくれて。それで、店にもあなたを探しに人が来たつて話していると突然切れて」

「おかしいな」

佐木田はさおりのことについても聞きたかった。

どの程度の知り合いなのか。弟の彼女を匿つたのはなぜだうとか、聞きたいことが山ほどあつた。弟の居場所もホントは知つているのではないか。

「英ちゃん、今晚来る？」

「うーん、これから大阪へ行く予定だ」

「花絵さんの居場所知つてるの？」

「いや、何も知らない」

「私も行く」

「は？ 遊びじゃないんだよ。それに変な奴らも絡んでるんだ」

「私、以前花絵さんに働いていた店聞いたもん」

「どこだよ」

「だから、今から駅へ行くから待つてて」

妙に嬉しそうな声で話す久ちゃんは電話を切つた。

佐木田はブツブツと怒つていた。

「何だよ、旅行じゃないつて言つてんだる。一人で行く意味なんてないのに」

それでも、大阪に行かないと花絵と正勝のことが心配だ。

佐木田は石上刑事に電話をした。さおりについて心配だから見てほしいということと、もう一つ聞きたいことがあつた。

「石上だ」

「佐木田です」

「ああ、どうしたんだい」

「花絵さんの家にさおりが来て、正勝の上着を持ってきてるんだけど、銃で撃たれた穴があいてるんだ」

「うん？ 銃創？ わかつた。住所は」

伝えると佐木田はさらにこう言った。

「寺田宝石店の祥子さんがいなくなつたんだけ、何か話を聞いてませんか」

「梓の近くの宝石店か？」

「そうです。旦那に奥さんを探すよつに頼まれてるんだけど」

「浮氣か？ それとも金か？」

「そこですけど、ちょっと何か掘んでたら教えてもらえないかなと」

「おじおい、こっちが便利屋じやないんだから」

石上はそう言つが、決して怒つてはいないと分かる。このことを伝えておけば、きっと何かアンテナを広げてくれるに違いない。

「じゃ、お願ひします。今日は梓に行けませんから」

「どこへ行くの」

「大阪へ、久ちゃんまで行くつて」

「おお、それはそれは羨ましい。しつぱりと大阪の街へ」

「違いますよ、そんののじやないんです。花絵さんが以前働いていた店を知つてるとか」

石上はニヤニヤしているよつで話を碌に聞かずに電話を切つた。

「違うのになあ」

そう言いながらも佐木田は久ちゃんとしづらべテーとしていな

なと思つた。

久ちゃんはぽつちやりしてるけど、なかなかのナイスボディだ。佐木田は駅に行く前に栄養ドリンクを一本飲んだ。

「つまー！」

心なしか足が弾んでる。

「俺もまだ若いな」

だが、そんな佐木田の前を寺田宝石店の店員が歩いていた。

あのときの手袋をはめていた人か。先日店に行つた時のこと思い出した。

彼女はなかなか綺麗で、祥子よりこつちがいのにと佐木田は勝手に思った。

彼女は栗色のボブにしていて、一重の目がチャームポイントだと、自分でも自覚しているような化粧をしていた。

彼女はふと後ろを何回か見るので、尾行されないか警戒しているように見えた。

声を掛けるつもりだった佐木田は、少し興味を感じて彼女の後を追つた。佐木田のことなど覚えてはいないだろう。

彼女の手には白い小さな紙袋と青いオーストリッヂのバッグを提げていた。

若いのにあのオーストリッヂを持つてているということは、あの店の給料はかなりいいということか。

それとも、あの寺田と愛人関係なのか、そうは見えなかつたが。佐木田は彼女が銀座線に乗ると、隣の入り口から乗つた。彼女はすぐに座つた。佐木田は新聞を広げて、彼女の様子を見ていた。白い紙袋には寺田宝石店の文字があつた。客に頼まれたのか、高い届け物かもしれない。少しがつかりして次の駅で下りようと思つた。

すると、彼女は決心したかのようにその紙袋を持って隣の車両に向かつた。

大きく息をした彼女の様子が奇異に見えた。

佐木田はそつと後をつけた。

彼女は隣の車両の入り口付近に立つてはいる男に渡した。胸ポケットに白いハンカチが見えた。あれは合図なのか。今時白いハンカチを胸に入れる男など電車で見たことはない。

佐木田は持つていたケータイで写真を撮つた。

祥子の失踪にどこか接点があるかもしれないのだから。

佐木田は彼女を追うのを止めて、東京駅に向かつた。

大阪へ行くことを忘れるところだった。

ホームでは久ちゃんが小さなボストンバッグを持って立っている。

「おいおい、本当に旅行気分かよ」

「遅いわよ、英ちゃん」

「だつて、大阪久しぶりなんだもん」

「こつちはお仕事なの」

「いいじやないの。旅行なんて初めてよ」

「だから、旅行じやないつて」

「意地悪」

思い切り腕をつねられた。

「いたたた

そう言えば、これだけ仲が良くて旅行はしたことがなかつた二人。

久ちゃんの手には駅弁があった。

「まあ、いいか」

久ちゃんは嬉しそうに腕を組んで一緒に乗った。佐木田は栄養ドリンクを飲んだことを思い出した。

「大阪の夜は暑いぞ」

佐木田の言葉をまるで疑わずに久ちゃんはいやだわと呟いた。

「私、ベビーパウダー忘れた」

「なんだよ、それ」

「アセモがすぐできるの」

佐木田はこの女のこんなところがいいなと思っていた。

佐木田は久ちゃんと新幹線に乗っていた。

駅弁を食べてビールを飲んで、佐木田は仕事を忘れてしまいそう

だと思つた。

「英ちゃん、ビール、もう一本飲もうか」

「おいおい、大阪へ着くまでに出来上がりううう」

「いいじゃない、もう一本くらい」

「そうだな、じゃ、もう一本だけ」

駅弁の卵焼きを頬張りながら微笑む久ちゃんは可愛い。

鶏の照り焼きもうまい。

こんな二人の旅行なんて無いと思つていた。

佐木田は外の景色を眺めながら、花絵と正勝の一人が消えたことを

を考えていた。

弟思いの姉に、早くいい結果を報告してやりたいが、物事はそう

簡単には進まない。

久ちゃんは買った週刊誌を読みながら、しきりと話しかけてくる。

「ねえ、英ちゃん、ほら、この一人噂通りよ。ホテルに消えたんだ

つて」

「そりや、若いんだもん。行くだらう」

素つ気ない返事しか出でこない。

「ほらほら、この人、この頃見な」と思つていたらラーメン店開い

たんだつて

「ふーん、芸能界よりそつちが売れると思つよ」

「私、結構この人好きだったのよ。いい男だし」

「そうか、足が短いぞ、この男」

「あら、英ちゃん妬いてるの」

「ふん、あり得ないね」

久ちゃんは拗ねて見せる。

まるで恋女房にでもなつたみたいだな。

佐木田は自分でもそんな錯覚に陥りそうな気がした。

のじのではない。

久が、人に口に見ていら

「ふーん、腹までは人間で腰からは馬か。だから嫌らしいんだな」

「意地悪ね！」

「英ちゃんは何座？」

「御は車内」

俺はやぎ座だよ

「そうぢろ? そんな氣がした

「ホント？ 相性悪いの？」

「え？ ホノー？ カンガー？」

久ちゃんは心配そうに見つめる。

ああ、たかひ、今夜は眠れなし」と、さう言つて笑つて、又うやうやしく

た。

今日は太陽のすゝほん料理食べよ。

いつの間にか久ちゃんの寝息が聞こえて目が覚めた。

「おい、もう新大阪に十分で着くぞ」

久ちゃんは大きく伸びました。佐木田は新大阪の夜のネオンに花

絵も正勝も「いいのかどうか」と思ひた
ノリ。これが勝田の「四」「六」「二」「四」など

久ちゃんは梅田の店だつたと言いながら佐木田と並んで歩く。

佐木田はケータイを取り出してビジネスホテルを予約した。

シングルしかない。

「今日はツインはいっぱいだ」

「えーっ、そんな。一人は嫌だわ。ここにしよう」

目の前の大好きなホテルを指さした。

「おい、そこは高いよ」

「いいの、英ちゃん、私旅行なんだからここに決めた。英ちゃんも泊まつて」

「俺のカードじゃ足が出ちゃいそうだよ」

「いいのよ、私が払うんだから」

「ちつ、カツ」「悪いなあ」

「私がどうしても行くつて決めたんだから、私が払つて当たり前よ」久ちゃんはフロントへ行くとさっさとツインを頼んだ。なんと、

一人が一万八千五百円。

絶対に佐木田は泊まらない金額だ。

ボーイが一人の荷物を持って歩く。

ターコイズブルーの張り替えたばかりの匂いがする絨毯をあるく。十四階だった。

久ちゃんはカーテンを開けてネオンを見つめた。

「花絵さん、ここにいるのよね。ここからだと近いわ

「どつちだい」

久ちゃんの肩を抱きながらそつそつと、とろけるような声で佐木田の耳元へ囁いた。

「一息入れてから行かない?」

久しぶりの彼女の唇は柔らかく、佐木田の舌が迫つていっても動じない。

ファスナーを下ろすと、黒いスリップに黒いブラ、そして、タンガだつた。

「おう、これはすごいなあ」

肩ひもをずらすと、簡単にスリップが落ちた。ぽっちゃりしてい

ても久ちゃんの体は男の掌には優しく吸いついてくるようだ。ブラもタンガも脱がす暇なく佐木田の舌が追う。

待ちかねているかのように佐木田の服を脱がそうと手を伸ばすが、触らせないよう佐木田は手を押さえて彼女の体に舌だけで応えていく。

「ああん、もういや」

「そうかい」

「意地悪なん、だ……から……」

体をうねらせる久ちゃんの熱い吐息。

服を脱いで立ち上がると、久ちゃんが傳ぐ。一人の時間が緩やかに進む。

波がうねるよう体が動く。

これほど女の体に溺れそうになるのは久しぶりのことだった。

「英ちゃん」

彼女の声が甘く、佐木田の耳を軽く噛みながら囁く。

どれほどの時間が経ったのだろうか。

佐木田は時計を見た。

「店が開いてるな」

「うん、行こうか」

「現金な女だな」

「帰つてから、またね」

「いや、もう仕事に没頭するー。」

「またまたー」

そんな甘つたるい時間を振り払つようにシャワーを浴びて着替えた。

久ちゃんは しつかり化粧をして新しいワンピースに着替えた。

大阪のクラブに負けたくないっていうのか。

女とは分からないものだと、佐木田は久ちゃんの耳に囁いた。

くすっと笑いながら「そうよ」と応える彼女は、夜のホステスの顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0130x/>

スモーキークォーツ

2011年10月8日03時28分発行